国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校
高等部教諭　松田　愛理子

音楽科における 個のニーズに応じた補足的支援の検討

Ⅰ．研究目的

【研究目的】
児童生徒の個のニーズに応じた支援を系統立ててできる指標を作成する為の指導・支援方法の実践検討

【これまでの研究】
- 補足的支援という観点
  ⇒LDへの支援であるRTIモデルより援用（図１）
- 音楽表現の活動プロセスの定義（図２）　等

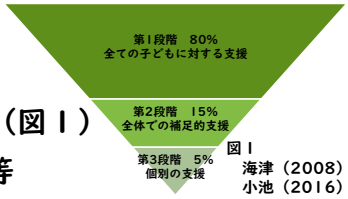

図１
海津（2008）、小池（2016）より作成

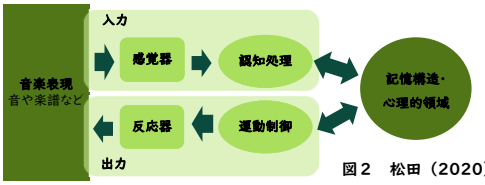

図２　松田（2020）

Ⅱ．研究方法（対象）

【第１研究】器楽指導における支援譜を用いた補足的支援の実践検証：小学部での器楽指導（小学部児童）

【第２研究】レコーディングによる歌唱指導の補足的支援としての有用性の検討：校歌指導（中・高の生徒）

Ⅲ－１．【第１研究】
器楽指導における支援譜を用いた補足的支援の実践検証

- 対象：小学部（S-M社会生活能力検査３歳７ヶ月～６歳10ヶ月のグループ）
- 活動目標：器楽合奏を行事で披露
- 演奏曲：『オーラリー（作曲：G.R.プルートン）』
- 使用楽器：鍵盤楽器（キーボード、オルガン）
- 使用楽譜：色箱楽譜（図３）
  - □ 山出(2020)を基に作成
  - □ 「おんがく☆☆☆特別支援学校小学部知的障害者用」より色指定（図４、５）

図３　オーラリー支援譜

図４　星本での表記

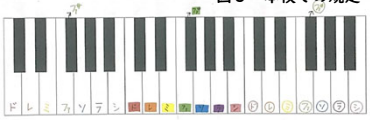

図５　本校での規定

- 結果
  - □ 教師のことばかけと説明後、練習しメロディを演奏できた
  - □ 行事本番、教師のピアノ伴奏に合わせメロディを演奏できた
- 支援譜に関する検討
  - □ 昨年度の実践も含め、小学部～高等部まで様々な生活段階の子どもたちに対し有効な支援であると考えられる
  - □ 細かいリズム表記が難しく、作成方法も含め今後も検討が必要

Ⅲ－２．【第２研究】
レコーディングによる歌唱指導の補足的支援としての有用性の検討

- 対象：中学部・高等部（２グループ）
- 活動目標：校歌斉唱用動画作成
- 演奏曲：本校校歌「すくすくのびる」
- 活動方法：DAW（Digital Audio Workstation）を用いて録音
- 使用音源：ピアノ伴奏、教師による範唱
- 結果
  - □ 式典等で使用する校歌の音源を作成できた
  - □ 範唱を聴き自身の歌唱の音程を調整する生徒がいた
    - 範唱音源の効果（山田他　2018）
    - 聴覚的な支援が有用な生徒に対して効果的と推察
    - アセスメントツールとしての効果も期待できる
  - □ 歌わない生徒の存在
    - 新しい活動に対する不安感と歌唱に対する苦手意識
      ⇒苦手な生徒への指導と配慮が必要
    - 音痴意識の原因が音楽科教育である可能性（小畑　2005）
      ⇒できない経験を減らすために早期支援が重要
- DAWを使用する効果
  - □ 歌唱データを視覚的に評価できる
    - マイクを使用した歌唱指導の評価が可能か

Ⅳ．考察

- 第１研究：細かいリズムへの対応等検討が必要
- 第２研究：次年度も検討を続ける
- ICTの利活用がどちらの研究においても鍵となる
  ⇒GIGAスクール構想による一人１台のICT端末
- 新しい時代に求められる音楽科教育を今後も検討

【引用・参考文献】

1)海津亜希子・田沼実畝・平木こゆみ・伊藤由美・Vaughn Sharon（2008）：通常の学級における多層指導モデル（MIM）の効果：小学1年生に対する特殊音節標記の読み書きの指導を通じて．教育心理学研究，56，4，534-547.
2)小池敏英監修（2016）：『健康ライブラリー　イラスト版　LDの子の読み書き支援がわかる本』.
3)松田愛理子（2020）インクルーシブ教育における音楽表現活動のあり方と補足的支援―高等部音楽科バンド実践を通して―．大阪教育大学障害児教育研究紀要，42，15－28.
4)松田愛理子（2020）音楽科における個のニーズに応じた補足的支援について．大阪教育大学附属特別支援学校令和元年度紀要，45－46.
5)小畑千尋（2005）：「音痴」の心理面――成人を対象とした「音痴」克服のための歌唱指導を通して――．音楽教育実践ジャーナル，2，2，107-115.